



# 姉川の合戦

## その周辺の歴史



元龜元年(1570)6月28日、浅井長政・朝倉景健の連合軍と、織田信長・徳川家康の連合軍が長浜市に流れる姉川の兩岸で壮絶な合戦を繰り広げた。旧陸軍参謀本部が編集した日本戦史によれば、浅井朝倉軍が18000人、織田・徳川連合軍が29000人とされ、合戦は午前5時に始まり午後2時に終わったといわれる。結果は織田・徳川連合軍の勝利となり、浅井朝倉軍は小谷城など後方に撤退した。この合戦により姉川は数多くの死者が出たと伝えられ、この地に残る血染血川といった名は当時の激戦の様子を物語っている。この他、信長本陣址など多くの史跡が残っている。

観光ガイドのご案内  
 長浜観光ボランティアガイド協会  
 TEL.0749-65-0370 FAX.0748-65-0380  
[http://kitabiwako.jp/volunteer-guide/vol\\_nagahama](http://kitabiwako.jp/volunteer-guide/vol_nagahama)  
 お問い合わせ  
 長浜市観光振興課 TEL.0749-65-6521  
<http://kitabiwako.jp>



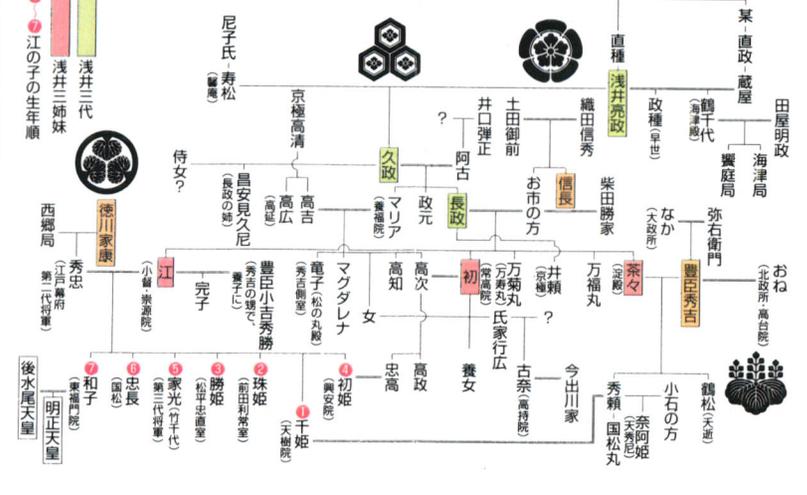
### 姉川の合戦と浅井氏関連年表

浅井長政、織田信長の妹お市と結婚。  
 信長に朝倉攻めをしないことを約束させる。  
 4月 越前へ乗合にいた足利義昭は信長に落ちを頼む。  
 7月 長政は信長より義昭の近江通過の了解を求められる。義昭を赤尾湖近くで迎え、小谷城にて款待する。  
 10月 信長、義昭とともに京都に入る。  
 信長は朝倉氏が度重なる上洛の随行命令に応じないために朝倉攻めを決意する。  
 4月 織田信長、越前朝倉氏を攻撃。朝倉氏との同盟を重んじた長政は信長に離反する。  
 6月19日 織田信長、浅井長政を討つため岐阜城を占領。  
 6月20日 信長、虎御前山に陣を設ける。  
 小谷城下で放火。  
 信長、堅固な山城である小谷城を一時に攻め落とすのは無理と判断し、陣を後退。  
 龍ヶ鼻に陣を置く。  
 援軍の徳川家康到着。  
 浅井側にも救援の朝倉景健軍到着。  
 大依山にも布陣、横山城を攻める織田軍の背後をつかがう形をとる。  
 27日 浅井朝倉軍、大依山から進軍開始。  
 28日 織田北岸の野村に浅井軍、三田村に朝倉軍が布陣。  
 28日 織田軍の正面に浅井軍、徳川軍の正面に朝倉軍が対峙する。  
 織田・徳川連合軍、浅井朝倉連合軍と衝突。姉川の合戦が繰り広げられる。  
 午後2時 朝倉軍は敗走する。浅井軍も敗走する。  
 木下藤吉郎秀吉が横山城の砦代城番となる。  
 信長軍大々撃を受ける。  
 元龜元年(1570)9月12日 志賀の陣、浅井朝倉軍、比叡山上へ南下し信長と戦む。  
 6月 信長、虎御前山に本陣を置く。  
 8月20日 朝倉義興、乗合から大野に逃れ自刃する(朝倉氏の滅亡)。  
 9月1日 信長、小谷城に砲撃をかけ、長政(29歳)が小谷城で自刃する(浅井氏滅亡)。

### ■姉川の合戦までの道程

元龜元年(1570)4月21日、織田信長は度々の上洛命令を無視していた朝倉義興を攻めるため、3万の兵を率い京都をたつた。しかし、信長が木ノ芽峠を超えて朝倉氏の本拠へ進入する頃、江北戦国大名で自らの妹婿である浅井長政が朝倉氏に与り、信長に叛旗を翻したことを知る。前後を敵に囲まれた信長は、木下秀吉に殿しんがり軍をまかせ、若狭を経由して京都へ脱出。朝倉攻めは浅井氏の離反によって失敗した。  
 信長は京都から岐阜に帰り、今度は浅井長政を討つため兵力を調え、同年6月19日に北近江に侵攻する。浅井長政の居城である小谷城の正面に位置する虎御前山に陣を置き、秀吉以下の家臣に命じて小谷城下を放火してまわらせた。しかし、堅固な小谷城を一時に攻めるのは無理と判断し、全軍を退かせ、後方にある浅井氏の支城、横山城を包囲する。合流した徳川家康とともに横山北端の龍ヶ鼻に陣取った。これに対し、横山城を救援するため浅井軍は越前の朝倉景健(義興の一族軍)と共に、大依山に布陣。6月28日未明までは、姉川北岸の野村・三田村に移動する。信長もこれに対し、姉川南岸の東上坂集落東の陣杭の柳付近に陣をばり、徳川家康は近くの岡山に陣を構え、早朝合戦の火蓋が切つて落とされたのである。  
 ■姉川の合戦その後  
 織田・徳川連合軍の優勢が終わった姉川の合戦、しかしこの戦いで浅井朝倉氏を滅ぼすまでにはいかなかった両氏と信長の攻防は、これから3年も継続する。浅井朝倉軍は徐々に劣勢となり、元龜三年(1572)には、信の前線は横山城から虎御前山城まで前進し、浅井軍は追いつめられる。この翌年の天正元年(1573)8月には信長軍の総攻撃開始される。近江まで出張してきた朝倉義興は、近江越前の国境付近で惨敗し、越前大野で自刃。浅井も小谷城を攻められ、9月1日浅井長政は自刃して果てた。

### 浅井三代三姉妹をめぐる人々系図





- 北郷里公民館(東上坂町) P 姉川南岸・織田・徳川コーススタート地点
- 遠藤喜右衛門直経の墓(東上坂町) 浅井氏の重臣・遠藤直経が戦死した場所と伝えられます。姉川合戦の際、自軍の敗色が濃くなると、味方の武将首一つを携え敵軍に偽装、信長の陣中深く忍び込みましたが、竹中重矩(しげの、半兵衛の弟)に見破られ、討ち死にしたと言われています。
- 龍ヶ鼻曲輪跡(東上坂町) 信長は堅固な山城である小谷城を一時に攻め落とすのは無理と判断し、虎御前山の陣を後退しました。浅井氏の支城である横山城を包囲し、龍ヶ鼻に陣を置きました。援軍の徳川家康もこの地に到着しました。
- ちほら公園(三田町) P 姉川北岸・浅井・朝倉コーススタート地点
- 織田信長と陣杖の柳(東上坂町) 合戦当日未明、信長は姉川北岸への浅井・朝倉軍の進軍を知り、龍ヶ鼻陣所よりこの場所に本陣を構えたとされています。ここに立つ柳は、信長が陣杖をかきつけて指揮をしたという伝承があり、「陣杖」は本来「陣鼓」と書かれたとも言われます。一方、信長本陣の柵に使われた

生木が自生したと伝わりますが、現在の柳は平成元年に3代目の木から枝を取った4代目に当たります。

● 徳川家康と岡山(徳山・東上坂町) この背後の山は、元来「岡山」といいましたが、姉川合戦の際に徳川家康が陣を敷き、戦いに勝ったことに因んで「勝山」と呼ばれるようになったとされます。徳川家康軍は激戦の末に朝倉軍を敗走させ、それにより劣勢の織田軍も盛り返し、勝利を得たと伝えられています。陣内の大杉の上部が枯れているのは、合戦の折、簡軍の矢が飛びかかって枝を折ったためと伝えられています。

● 三田村氏館跡(三田町) P 中世の地侍・三田村氏の屋敷跡。現在は伝正寺となっていますが、土塁の残りは良好です。朝倉軍の本陣が置かれたと推定される所です。平成19年7月26日「北近江館跡群」の一つとして国指定史跡となりました。

● 上坂氏館跡(西上坂町) 京極氏の有力家臣であった上坂氏は、戦国時代には浅井氏に仕え、浅井氏没後、羽柴秀長の家臣とな

ります。関ヶ原合戦に敗れ、帰農します。中世から江戸時代にかけて姉川からの農業用水を管理したことで知られます。

● 石田三成出生地(石田町) 豊臣秀吉の五奉行の一人として活躍した石田三成の出生地です。三成の父親・正継は浅井長政の家臣で、石田村の地侍です。この地を北端とした1町4反の場所は小字「治部」と呼ばれ、石田家の屋敷跡と伝えられています。また、近くには石田家の墓地和、同家の氏神と伝えられる八幡神社があります。

● 国友鉄砲の里資料館(国友町) P 戦国時代、鉄砲の産地として栄えた国友町の歴史を紹介する資料館。鉄砲鍛冶の仕事ぶりや、実物の火縄銃を展示しています。

● 観音寺・近江西国十二番(米原市朝日) P 豊臣秀吉が鷹狩りで立ち寄った際、寺の小姓であった石田三成を「三歳の才」(最初、ぬるい茶をすめ、二度目は前より少し熱く少なめに、三度目は小さな茶碗に熱い茶をわずかに献じたのです)で見出したことで有名。その水を汲んだとされる古井戸も残っています。

● 浅井・朝倉連合軍  
● 織田・徳川連合軍

● 浅井長政と陣杖の柳(東上坂町) 浅井長政は、28日の前日まで北方の大依山に布陣し、織田・徳川の動向をうかがっていましたが、28日未明、当地に軍を進め、決戦に挑んだとされています。かつては小高い丘が存在し、浅井長政の本陣跡と伝えられてきました。

● 三田村氏館跡(三田町) P 中世の地侍・三田村氏の屋敷跡。現在は伝正寺となっていますが、土塁の残りは良好です。朝倉軍の本陣が置かれたと推定される所です。平成19年7月26日「北近江館跡群」の一つとして国指定史跡となりました。

● 上坂氏館跡(西上坂町) 京極氏の有力家臣であった上坂氏は、戦国時代には浅井氏に仕え、浅井氏没後、羽柴秀長の家臣とな



姉川合戦布陣図 元禄元年(1697)六月二十八日(現在布陣で江戸月26日)午前五時